

## メッセージアウトライン 出エジプト記1:1~22 「苦しめれば苦しめるほど」

[1-5] あの七年の大飢饉の時、すでにエジプトでファラオに次ぐ権力者となっていたヨセフの計らいで、父イスラエルとその一族は皆エジプトへ移住し、そこに滞在することとなった。これは神の摂理によるご計画であった。イスラエル（ヤコブ）の息子たちはルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ベニヤミン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、ヨセフで全部で十二人。彼らからイスラエルの十二部族が増え広がった。

「ヤコブの腰から生まれ出た者の総数は七十名であった」(5) →創世記46:8~27参照

[6-7] 「それから、ヨセフもその兄弟たちも、またその時代の人々もみな死んだ。イスラエルの子らは多くの子を生んで、群れ広がり、増えて非常に強くなった。こうしてその地は彼らで満ちた」

「みな死んだ」とは長い期間が経過していることの表現。子孫が増え広がることは神の祝福であった。「その地」とは彼らが住んでいたナイル川河口東部の牧草の豊かなゴシェンの地である。そこはヨセフの計らいで彼らが滞在できるようになった地である。イスラエル人の増える割合はエジプト人よりも大きかった。

[8] 「やがて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった」

出エジプトの年代は早期説と後期説があるが、早期説をとればこの王は第十八代王朝のアアフメス一世ではないかと考えられており、後期説の場合はラメセス二世か、その父のセトス一世と考えられている。いずれにしても王朝が変わったことにより、イスラエルの民は厳しい試練に直面しなければならなくなった。この時はすでにイスラエルの一族がエジプトに滞在するようになってから350年ほど経過していると思われる。

エジプト滞在期間430年(出12:41)－80歳(出エジプト時のモーセの年齢 使徒7:23,30)=350年(

モーセ誕生の頃 出エジプト2章) この間に何代も王朝が変わっているのでエジプトのために偉大な貢献をしたヨセフのことが忘れられても無理はない。

[9] 「彼は民に言った。『見よ。イスラエルの民はわれわれよりも多く、また強い』」

実際にそうになっていたのか、あるいはファラオがエジプト人の危機感をあおるために誇張して言ったのかわからない。しかし、イスラエル人がエジプトにとって軽視できないほどの大きな存在となっていたのは確かであろう。

[10] 「さあ、彼らを賢く取り扱おう。彼らが多くなり、いざ戦いというときに敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くことがないように」

ファラオの恐れは、単にイスラエルの民が増え広がり、強くなっていったことだけではなく、その民がエジプトに敵対する外国の勢力と結びつくことにあった。[11]「そこで、彼らを重い労役で苦しめようと、彼らの上に役務の監督を任命した。また、ファラオのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた」

イスラエル人を重い労役につかせることによって、気力、体力を消耗させ、疲弊させ、外国勢力と結びつかないように押さえ込んでおこうというのである。

「役務の監督」はエジプト人であった。倉庫の町ピトムとラメセスは彼らが住むゴシェンの近くに建設された。この倉庫は町の至るところに建てられ、そこには多くの穀物や食料が貯えられたことだろう。

エジプトというとピラミッドが有名であるが、ピラミッドは主にエジプトの古王国時代(BC 2500~2700年)に王の権力を示すために建てられたものであり、それはイスラエル人の祖先アブラハムよりもっと前の時代であった。それゆえ、イスラエル人のエジプト滞在中の時代にはピラミッド建設に従事することはなかったと思われる。最近の研究ではエジプトの民が農作業を行わない時期に公共事業としてピラミッド建設に参加させ、その労働に従事した民には食料が与えられたという説がある。

[12]「しかし、苦しめれば苦しめるほど、この民はますます増え広がったので、人々はイスラエルの子らに恐怖を抱くようになった」

イスラエル人を苦しめれば弱り衰えるかといえばそうではなく、彼らはますます増えていった。ここにも神の御手が働いており、ファラオの計画は思うようにはいかなかった。それでエジプト人はイスラエル人を恐れた。彼らの背後には人間の知恵や力ではどうしようもない力が働いているのに気がついてきたのかも知れない。

[13-14]「それでエジプト人は、イスラエルの子らに過酷な労働を課し、漆喰やれんが作りの激しい労働や、畑のあらゆる労働など、彼らに課す過酷なすべての労働で、彼らの生活を苦しいものにした」

彼らとその労働のゆえに死んでもかまわない。かえって、そのほうが好都合であったかもしれない。「漆喰」…消石灰にわら、ふのり、糸くず、粘土などを混ぜて練ったもの。壁材等に用いる。「れんが」…ナイル川の粘土質の泥に砂とわらを切ったものを混ぜ合わせ、型に入れて天日で乾燥させて作った建築材料。もちろん、これらを用いて建物を建てることもしたであろう。

「畑のあらゆる労働」…原文では必ずしも畑に限定されない。運河作りやあらゆる土木作業にも従事させられたであろう。こういった仕事をエジプトの強烈な炎天下でしなければならないことは、どんなに過酷な労働であったか想像するに余りある。

[15-16]「また、エジプトの王は、ヘブル人の助産婦たちに命じた。一人の名はシ

フラ、もう一人の名はプアであった。彼は言った『「ヘブル人の女の出産を助けるとき、産み台の上を見て、もし男の子なら、殺さなければならない。女の子なら、生かしておけ。』」

ヘブル人の助産婦は二人しかいなかったのではなく、彼女たちは多くの助産婦たちの総責任者のような立場であったのだろう。産まれたのが男の子なら殺さなければならない…。これならやがてイスラエル人は女ばかりになって弱体化するにちがいないというわけである。恐ろしいことを考えつくものである。当時は民主主義などというものはなく、絶対的な専制君主であるファラオが権力を持っていたので、その命令一下、すべてのことが行われた。まさにファラオは人を生かしても殺しもできたのである。

[17]「しかし、助産婦たちは神を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにはしないで、男の子を生かしておいた」

アブラハム、イサク、ヤコブと続いてきた、まことの神を恐れ、信じ従う信仰は三百五十年エジプトに滞在していても、失われることなく綿々と受け継がれていたことがわかる。特に助産婦という仕事は人の誕生の場面に立ち会うので、いのちというものを深く考え、それをお与えになる神がおられることを体験的によくわかっていたのではないだろうか。それゆえ彼女たちはファラオの命令に逆らうことがどれほど危険なことであるかを知りながらも、あえて、その命令を破り、男の子が生まれてきても生かしておいたのである。

[18] ファラオは自分の命令が実行に移されていないことを知り、シフラとプアを呼び寄せて詰問した。

[19]「助産婦たちはファラオに答えた。『ヘブル人の女はエジプト人の女とは違います。彼女たちは元気で、助産婦が行く前に産んでしまうのです。』」

ここではヘブル人の女は元気であると説明されている。それでヘブル人の女は助産婦が行く前に産んでしまうというのである。エジプトの最高権力者であるファラオの前でこのようなことを言えるとは、相当肝っ玉のすわった女性であったに違いない。彼女たちの説明は確かにそうであったかもしれないが、それでもすべての場合においてそうであったわけではないであろう。

彼女たちは神を恐れるがゆえに、一部うそをついてまでもファラオの命令を破り、産まれた男の子たちのいのちを助けたのである。彼女たちは、ファラオの命令が明白に神の望んでおられることではないと知っていたので、あえて危険を冒してまでこのようにしたのであろう。

[20-21]「神はこの助産婦たちに良くしてくださった。そのため、この民は増えて非常に強くなった。助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせた」

神は彼女たちの行動を見ておられた。そして豊かな祝福をもって答えてくださ

った。イスラエルの民はますます増え、強くなり、神は彼女たちの家を繁栄させてくださったのである。

[22]「ファラオは自分のすべての民に次のように命じた。『生まれた男の子はみな、ナイル川に投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかなければならない』」

ファラオはついに最終的な強硬手段に訴えてきた。これは出産直後だけではなく、すでに生まれて何か月もたっている男の子でもナイル川に投げ込んで殺せという恐ろしい命令である。

一国の権力者が目的のためには手段を選ばないようにになると、このような残酷で恐ろしい方法が用いられることになる。当時のエジプトは世界の大帝国である。その最高権力者であるファラオは自分を神にも等しい者だと思っていたのであろう。ファラオが命令を出したら誰も止めることができない。この恐ろしい政策がいつまで続くかはわからないが、イスラエルの民にとってこのような絶対絶命の時を通して、神の救いの計画が着々と進められていくのである。

ファラオはその権力を最大限に発揮することはできるが、神の御手は止めることはできない。ファラオはイスラエルの民を残酷な方法で苦しめ、迫害するが、それも神の許しのもとでなされることに過ぎない。人間的に見れば物事は少しも良くならず、前途に何の希望の光も見えないような時を過ごさなければならないかもしれないが、神はそのご計画を確かに進めておられる。

神はご自分の民をそのような試練を通されるが、神の民は苦しめれば苦しめるほど、神に頼り、神に守られ、神に支えられ、祝福され、増え広がっていくのである。

私たちも、苦しめられれば苦しめられるほど増え広がったイスラエルの民のように、どのような環境に置かれても、ただ神を恐れ、神に信頼し、神が最善をなされ、ちょうど良い時に助け出し、救ってくださることを固く信じて、忍耐をもって従いたい。

神はそのひとり子イエス・キリストを私たちの救いのために、人としてこの世に送られ、私たちの罪を贖うために十字架につけるほどに愛してくださった。

主イエスは私たち人間に苦しめられれば苦しめられるほど、父なる神により頼み、祈り、その使命を全うするために十字架への道を歩まれた。私たちもこの救い主イエス・キリストに心より信頼し、喜び、感謝、祈り、そして忍耐をもって従い続けることが大切である。

→ヨハネ3：16、Iテサロニケ5：16～18、ヘブル10：36、ヤコブ1：2～4、Iペテロ1：5～7